

授業前 授業改善の意欲をもつ

新採2年目のA教諭は、毎日の授業を計画的に進めることに精一杯で、なかなかこの学校の生徒になじめないでいた。

ある日同学年のB教諭の机の上に、クラスの生徒全員のノートがのっているのを見つけ、B教諭に話しかけた。B教諭は、「私は、新しい単元に入ると、必ず全員に授業の感想を書かせています。そうすると、自然と授業中も一人一人と目が合って、クラス全体が授業に乗ってくるようになります。」と話した。A教諭が見せてもらおうと、普段A教諭の指示にはなかなか従わない生徒のノートも提出してあり、丁寧な字で感想と疑問点を書いてあった。また、その後ろにはB教諭の温かな励ましと疑問点の答えが簡潔に書かれていた。

A教諭は次の時間、さっそくノートに感想を書かせ、集めてみた。ノートには、予想以上にたくさんの感想、質問などが書かれていた。A教諭は一人一人の顔を思い浮かべながら読むうちに、なぜ質問しても答えなかったのか、どこが分かりにくかったのかが分かってきた。「そうか。それならばこのような展開にしよう。」

A教諭は、自分自身も授業に向けて意欲が増していることを実感した。



授業は、教師、子供、教材の三者で構成されると言われ、教師には多くの実践的指導力が求められます。

一方、どんなに優れた指導法を身に付けていても、授業の進め方に悩むことがあります。これは多くの場合、子供との人間関係づくりに原因があることが多いようです。では、どのようにして改善していけばよいのでしょうか。

一人一人の子供の声を授業改善に生かす

よい授業は人間関係づくりから、具体的には子供一人一人の声を聞くことから始まると言われますが、このことは1時間1時間の授業の中だけで十分にできることではありません。

この事例では、A教諭は人間関係づくりのノウハウをB教諭から学んでいます。ノートに感想を書かせること、そこに教師が簡潔にコメントを書くことは一見時間ばかりかかる非効率的な方法のように見えますが、

- ① 教師にとっては個々の課題が的確に把握できる。
- ② 子供にとっては授業の振り返りとなる。
- ③ 教師が答えることで、一人一人へのワンポイントレッスンや個別の評価・励ましの機会となる。

というメリットがあります。B教諭も、実践してみて手応えがあったからこそA教諭に勧めたのでしょう。

これは一つの実例ですが、よりよい授業にしていくなめには、まず教師が具体的に子供の心に迫ってみることが大切です。そうした試みの手応えがまた、教師自身の意欲にもつながるのです。